
バカと最強の男の娘と召喚獣

クリオネ(沙*・　・)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと最強の男の娘と召喚獣

【NZコード】

N5869X

【作者名】

クリオネ（沙＊・＊・）

【あらすじ】

あのバカテスに最強の男の娘を加えた感じです。ストーリーは原作 + オリジナルで頑張ります。カツプリングは明久×姫路、雄一×霧島、康太×愛子、オリ×秀吉×優子で行きます。作者には文才が全くありません。それでもいって人は是非見てください…よろしくお願いします！

オリキャラ設定（前書き）

作者のクリオネでーす＼（^ー^）／（^ー^）／
このストーリーはいいかも！と思つて書きました。
バカと戦争と召喚獣の方もよろしくお願いします

オリキャラ設定

風峰 光 カザミネ ライト

性別 男 (秀吉)

容姿 髪は水色で腰まで伸ばしている。髪型はFFのクラウド瞳は琥珀色。

顔は秀吉と同じかそれ以上ぐらい可愛い。

身長は143cmで体重は37kg 音楽が好きなためいつもイヤホンを左耳に付けている。

性格 女と言われると怒る(それ以外は冷静)。そして明久並みに鈍感。

趣味 音楽鑑賞、蜃鏡、悪巧み、ゲーム、漫画

特技 神峰流武術、暗器の使用、変装(完璧)、声帯模写(完璧)、情報収集、歌

肩書き 特別観察者(観察処分者とは違いファードバックがなく物理干渉ができる)

一人称 我

三人称 風峰、ライト

二つ名 『水色の暗殺者』

得意科目 保健体育以外（理数系、英語は特に得意）

苦手科目 保健体育（一桁）

総合科目 80000~90000点

家族 両親は海外の会社で仕事、兄は海外で勉強している。

友達 明久と康太と木下姉弟とは幼馴染。雄一+明久は悪友。姫路とも知り合い。

召喚獣 本人をそのままちっちゃくした感じ。

武器 ベレッタM92×2（ベレッタとは銃の名前です）

装備 タキシードにマント（黒）

腕輪 ライトニング
光速

効果 3分間光の速さで移動できるが操作が難しくなる。

消費点数 30点

オリキャラ設定（後書き）

どうでしたか？最初の方は投稿は早いと思います。
のでよろしく！

第一話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用意するべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点 . . . マグネシウムに炎をかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例 . . . ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひつかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点 . . . ガス代を払つていなかつたこと」

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

「合金の例 . . . 未来合金（すゝく強い）」

教師のコメント

「うまい」と強く述べられましても。

風峰光の答え

「問題点 . . . まず、自分で鍋を作ったこと。
合金の例 . . . ジュラルミニン」

教師のコメント

いや～例えですか。なのに合金の例が合つてない
事に腹が立ちます。

第一話

俺たちがこの文円学園に入学してから、一度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇つていて、

別に花を愛でるほどの雅な人間ではないが、その眺めには一瞬目を奪われる。

でも、それも一瞬のこと。

「吉井、風峰遅刻だぞ」

校門の前でドスガキいた声に呼び止められる。

「あ、鉄じーーじゃなくて、西村先生おはよーい」やれこまわ

「おはよーい」やれこまわ。先生

「おはよーい風峰、そして吉井今鉄入つて言わなかつたか？」

「ははつ。氣のせいですよ

「ん、そつか？」

明久お前本当に馬鹿だな。少しは頭使え。

「それにしても普通に『おはよーい』やれこまわ』じゃないだろ

「うが」

「あ、すいません。えーと——今日も肌が黒いですね」

「遅れてきてすいません」

「風峰は良し、吉井お前は遅刻の謝罪よりも俺の肌の方が重要なのか？」

「そつちでしたかすいません」

「そつち以外なにがあるんだよ！」

「全くお前というヤツは……いくらバツを『えても全然懲りないな」

ため息混じりに先生がつぶやく。

「先生、僕そんなに遅刻はありませんよ？」

「遅刻は、な。ほら受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、俺たちに差し出してくる。

「先生、俺はいるないですが……」

「一応だ。受け取つておけ」

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

「俺はおまえを去年一年見てきて『もしかすると、吉井は馬鹿なんじやないか?』なんて疑いを抱いていたんだ」

おいつーそこには疑いをもつちゃいけねえよー。

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解しているようじや、更に

『節穴』なんて渾名を付けられちゃいますよ?」

お前の頭は大丈夫か?

「ああ。振り分け試験の結果を見て先生の間違いに気がついたよ」

「そう言つてもうるさいと嬉しいです」

「喜べ吉井。お前の疑いはなくなつた」

『吉井明久・・・Fクラス』

「お前は馬鹿だ」

こうして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

「・・・なんだろう、このバカでかい教室は

「見るな明久。見たら見るほどFクラスに行けなくなるぞ」

「そうだね。Aクラスがここまですごいんだ、Fクラス違う意味で

す」）「クラスだらうね」

「分かつたなら行くぞ」

俺たちは走り出さない程度に廊下を急いで進んでいった。

「あれ？」の「う」と「か」？僕には見えないや

「明久、現実逃避するな。ここがFクラスだ」

全く現実逃避するぐらいだつたら勉強しない。

「まず俺が入るからお前は後からはいれ」

「うつ、うそ」

「すいません。遅れちゃいました」

「早く座れ、この蛆虫野……郎？」

入つていきなり罵倒とは地獄の片道切符をくれてやろうつかな。

「ほつ、俺を蛆虫扱いするとは覚悟はできるんだな？雄一」

「まつ、待て！俺はお前に言つたんじやなく……」

「問答無用……」

「バキッ！ボコッ！ガスッ！」

俺は視線をあびていること元気ずいた。

「なつ、なんだ？」

「カツ、カツ、可愛い~~~~~」

「なつ、何言いやがるー？俺は男だーー！」

モ「俺と付き合つてくれ~~~~~！」

モ「俺と結婚してくれ~~~~~！」

「くつ、来るなー！変態共ー！」

俺は一斉に木製くないを投げた。

「グツハ~~~~~！」

「ねえライト、これはどうしたの？」

いつの間にか明久が入ってきていた。

「雄一は蛆虫扱いしたからボコッた。あいつらは俺を女と言
いやがつた

から潰した。」

「そりなんだ。あ、それと席どこでもこいらじこと

「やつなのか？なら一番後ろに座るか

「だね」

俺たちは席に着いた。ファーアアアア…昨日ゲームのしすぎで睡眠時間たら

ねえ。少し寝るか。

「明久、俺のことになつた時は起こしてくれ」

「うん。分かつたよ

俺は眠りこついた。

「う…ん…起き…」

「う…ん…」

「ライト起きて」

「うん？明久おはよっ、で今何？

「血口紹介だよ。次、ライトの番だよ」

おつと前のやつ終わったな。

「ああ、ありがとな

「俺は風峰 光だ。言つとくが俺は男だ」

モ「何つ…秀吉並みの男の娘だと…」

モ「スゲー…！」

「だつ、黙れ…！」

俺は再び木製くないを投げた。

「「グハつ…！」」

「はい、そこの人静かにしてください」

ガツシャ～～ン…！」

「変えを持つきますので静かにしてください」

先生は机を取りに行つた。どんだけボロいんだよ。

「雄一、ライトちょっと廊下に出てくれる」

「わかった」

教室を出た。どうかしたのだろうか？

「雄一、ライト一年になつたんだし試合戦争しない？」

「どうした？ 戦争をしたいなんて

「全く、お前は何を考えてるんだ？」

「いやー、あの設備はさすがに無理があるかなつて思つたか

「嘘だな。お前分かりやすい嘘を付くな」

「そうだ、それに姫路の為だろ？」

「なんで、分かったの？」

「お前、俺は何年お前の幼馴染やつてきたと思つてる？」

「まあ、いいだろ。実は俺も仕掛けようと思つてたんだ」

「雄二も？」トイツの場合はあれを超えるためだろ？」

「雄二も？なんで？」

「世の中勉強だけが全てじゃないことを証明したいんだ」

「なるほどな。うん、先生が帰ってきたから教室に入るぞ」

「うん」

「いいで一旦教室に入つた。

「では坂本くん。君が最後です。」

「ああ、では」の代表の坂本だ。坂本でも代表でも好きに

読んでくれ

さすがだな。手馴れてるな。

「さて、お前らにひとつ聞きたい。Aクラスは冷蔵庫にリクライニングシートに個人エアコンならしいが……不満はないか?」

「…………大有りじゃああ————！」

「だろ?俺もこの設備には大いに不満だ。だから、俺たちFクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛ける

俺たちFクラスが戦争といつも引き金を引いた。

第一話（後書き）

どうでしたか？おもしろかったならコメントください。
よろしくお願いします。

第一話（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（2）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喻え』

姫路瑞希の答え

- 「（1）弘法にも筆の誤り」
- 「（2）泣きっ面に蜂」

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』。、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

土屋康太の答え

- 「（1）弘法の川流れ」

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 「泣きっ面蹴つたり」

風峰光の答え

- 「踏んだり蹴つたり」

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとって現実味の乏しい提案にしか思えなかつた。

モ「勝てるわけがない」

モードこれ以上設備が落とされるのは嫌だよ

始めるに堪へない老朽でござる」

モ「風峰ちゃん結婚していく下さい」

そんな悲鳴がにっぽい出でくる。最後のやつ絶対に潰す！

なんか作戦があつての宣言だな。

モ「何を馬鹿なことを

「… できるわけないだろう」

モード何を根拠があつてそんなことを

まあ、たしかにな。根拠がないんじゃ賛成はできないな。

「根拠ならあるぞ。」このクラスには試験召喚戦で勝つことのできる要素が

揃つてゐる」

うむ、あるつぢやあるがそれだけならダメだと思つが ． ． ．

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす悪友。

「おい、康太。畳みに顔をつけて姫路のスカートを覗きながらライトを撮つて

ないで前に出てこい」

「 . . . (ブンブン) 」

「はつ、はわ！」

「康太、ムツツリなのに直接スカートを覗くと死ぬぞ？」

必死になつて否定をし続ける康太。いや、否定してもバレてるから。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者だ^{ムツツリ}」

「 . . . (ブンブン) ！ 」

土屋康太ってゆう名前はそこまで有名じやないがムツツリー二の方はかなり有名

だ。

モ「馬鹿な、奴がムツツリー一だとこいつのか . . . 」

モ「だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だ隠そつとしているぞ . . . 」

モ「ああ。ムツツリに恥じない姿だ . . . 」

自分の下心を隠し続ける。ある意味すげいな。

「？？？」

姫路は全くわかつてないようだ。ムツツリーーーいつていつたら誰でもわかると思つ
が。。。

「姫路のことは説明する必要はないだろ？。皆だつてその力
はよく知つている
はずだ」

「えつ？わ、私ですか？」

「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

たしかにな、姫路は学年次席ぐらいの点数だからな。

モ「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた」
モ「彼女ならAクラスにも引けをとらない」
モ「ああ、彼女さえいれば何も要らないな」
モ「いや、俺は風峰ちゃんだな」

やつぱり、姫路の実力はほかの奴ら買つてるな。それと最後の
やつ殺す！

「木下秀吉だつている」

秀、演技ならす」)」が、点数はよくないはずだが・

モ「おお」

モ「ああ。あいつは確か木下優子の . . .
「当然俺も全力を尽くす」

モ「確かになんだかやつてくれそつな奴だ」

モ「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか?」

モ「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「それに、吉井明久だつている

. . . . シン

士氣が一気に下がつたな。明久の名前はオチ扱いか。

「ちよつと雄一と一緒にそこで僕の名前を呼ぶのさー全く
そんな必要は
ないよね!」

モ「誰だよ、吉井明久って」

モ「聞いたことないぞ」

「ホラ!折角上がりかけてた士氣に翳りが見えてるし!僕は
雄一たちとは

違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを つて、な
んで僕を睨むの? つて、な

士氣が下がつたのは僕のせいじゃないでしょ!」

ハツハツハ!すく面白いじゃねえか!

「そ、うか。知らな、いよ、うなら教えてやる。」この、の肩書きは
「観察処分者 だ」

モ「・・・それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ?」

「ち、違つよ、一、ちよつとお茶田な十六歳につけられる愛称
で」

「そ、うだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二!」

お茶田つて・・・お前はバカすぎるな。

「あの、それつてどうい、うものなんですか?」

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とかそついた類の雑
用を、特例として

物に触れるよ、うになつた試験召喚獣でこなすといつた具合だ

「そ、うなんですか?それつてす、ういですね。試験召喚獣つて
見た目と違つて力

持ちつて聞きましたから、そんなことが出来るなんて便利で
すよね」

姫路の田がキラキラしている。

「あはは。そんな大したもんじやないんだよ」

明久、偉いぞ自慢せずに謙虚のフリをするなんて。

モ「おーおー。観察処分者ってことは、試合戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?」

モ「だよな。それならおいでそれと召喚できないヤツが一人いるつてことになるよな」

まあ、自分にもダメージがあるんだ、それなら召喚したくないだろ?。

「氣にするな。どうせいてもいなくとも同じような雑魚だ」

「雄一、セレはボクをフォローする単語をいつべきだよね?」

「そして最後に風峰光だ。おい、ライト出でーこ」

「わかった

俺は教団にたつた。まう、見晴らしがいいな。
「ここいつの別名を知っているか?」

モ「知らねえな

モ「俺も」

「なら教えてやる。ここいつあの『水色の暗殺者』だ

モ「な、水色の暗殺者って・・・」

モ「暴力団2000人近くいたやつを30分で倒したってやつ
あの . . .

「そりだ、それにこいつには特別な肩書きがある」「

モ「なんだと！」

モ「肩書きは観察処分者だけじゃないのか」

「ああ、こいつの肩書きは 特別処分者 だ」

モ「特別処分者？」

モ「なんだ？それは」

「俺が言おう。特別処分者は観察処分者同様、物理干渉ができる。しかし
特別処分者はフィードバックがない。だから、観察処分者とは違つて普通
に召喚できる。その代わりで、テストやテストの丸付けなどをしないとい
けない」

モ「なら、テストの丸付けをすれば . . .」

「それは出来ない」

モ「なんでなんだ？」

「それは、鉄人が横にいるからだ」

「そりなんだ」

全員理解してくれたようだ。

「でも、前は鉄人と一緒に補修室で勉強教えてたけど・・・」

「それは、今回から暇なときは補修を手伝ってくれと頼まれたからだ」

モ「おお～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」

モ「補修室に天使が！」

モ「やつた～～～～～～～！」

なぜ、喜んでるんだ？

「それと、こいつの点数はAクラス主席確定の点数だ」

モ「おお～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」

「どれだけテンション高いんだ？」

「では、俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思つ」

力の証明か。面白そうだな！

「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

全モ「当然だ！――」

「ならば全員、筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

全モ「おおーーっ！…」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

全モ「うおおーーっ！…」

「おっ、おー…」

姫路も周りに圧されたのか、掛け声を出している。

「では、明久にはDクラスの死者になつてもうづ。無事大役を果たせ！」

「…下位勢力の使者つて大抵ひどい目に合つづよね？しかも、今字が違

つてなかつた？」

「気のせいだろ？明久大丈夫だ。お前なら逝ける！」

「今も字があ違つくなかった？」

「ちつ！勘がいい奴だ！

「大丈夫だ。奴らはお前に危害は加えることはない。騙されたとおもつて

行ってみる」

「本当に？」

「当たり前だ。大事な使者に手荒なマネはすることはない」「大丈夫、俺たちを信じろ。俺たちは人を騙すようなことはしない」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ

「バカだー。ここに世界一のバカがいるーー。」

「ああ、頼んだぞ」

明久は機嫌がよさそうにロクラスに向かった。

「くくっ、精精生き延びろよ。明久^{ニヤッ}」

「全くだな（ニヤッ）」

俺たちは明久がどんな姿で帰つてくるのか楽しみに待つていた。おつと、

その前に俺を女扱いしたやつを地獄行きにしないとな。俺は女扱いした

ヤツを殺しに行つた。ふふふ、明久が帰つてくる前に殺そーつと。

第一話（後書き）

クリオネです。明久って本当に馬鹿だなって思つ

光「全く、あんな嘘に引っかかるなんてバカ以外何もいえねえ」
ほんとですな

光「明久がどんな姿で帰つて来るか、楽しみだ」

そだね、ではまた次回会いましょう。

光「次も見てくれよな！」

第三話（前書き）

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。ちゃんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「X」

教師のコメント

できれば地球上の言葉で。

風峰光の答え

「これは私の本棚が愛用していた祖母です。」

教師のコメント

本棚と祖母が逆です。

「騙されたつ……」

「やはりつてきたか」

雄二と言葉が重なる。

「やはりつてなんだよ……やつぱり使者への暴行は予想道理だ
つたんじゃない
か！」

「当然だ。そんなことも予想できないようで代表が務まるか」

「少しば悪びれろよ……」

何を怒つてるんだ？

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

「平氣だよ。心配してくれてありがとつ

「良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

慌てて腕を抑えて転げまわる明久。

「そんなことはどうでもいい。それより今からマーティングを行つぞ」

雄一は扉を開けて外に出ていった。

「あの、痛かつたら言つてくださいね？」

「大変じゃつたの」

「日常茶飯事だから別に大丈夫じゃね？」

「ちょっとは心配してよー」

明久を少しからかった。

「…………（サスサス）」

「…………（ブンブン）」

「…………（ブンブン）」

「康太、お前がエロイのはいいの皆知つてるぞっ。」

「…………（ブンブン）」

「いいまでバレておるのに否定し続けるとは、ある意味凄いのじゃ」

「 (アンアンアン) 」

「 何色だった? 」

「 みずいろ 」

「 じだけ即答かよ! 」

「 やはりムツシロー! ほんのりんな意味です! 」

「 だな(ね) 」

「 (アンアン) 」

こんな会話をしながらゆっくり教室で話をしていくと。

「 せり吉井。あんたも来るの 」

ぐこつと明久をくつ張る島田。

「 あー、はこはこ 」

「 返事は一回 」

「 くーー 」

「 . . . 一度、 Das Brücken 」

えんど、日本

語だと . . . 」

「 . . . 調教」

「そりゃ。調教の必要がいりそうね」

「調教つて。せめて教育とか指導つて言つてくれない?」

「じゃ、中間をとつてN u c h t . T o g g e n

「折檻、だな」

「それ、悪化してるよね」

「そりゃ?」

なぜ、簡単な漢字が分からずに調教とか折檻なんて漢字知つてるんだ?

「ムツツリー。よく調教なぞとこひだりイツ語を知つてあるの?」

「 . . . 一般教養」

「相変わらず性に関しての知識はずば抜けてるな康太」

「 . . . (ブンブン)」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の裕一が屋上に通じる扉を開けて太陽のしたに出た。

開けて太陽のしたに出た。

「明久。宣戦布告はしてきただな？」

「まあ、してなかつたらもつ一回遡かせるけど」

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお皿」飯ついとね？」

「やうなるな。明久、今日の皿ぐらこはまともな物を食べろ
やう。」

「やう思つならパンでもおいとくれると嬉しいんだけど」

「仕方ない、ほれ」の弁当やるよ」

「あつがどうーでもいいの?食べる物なくなつちやうよ」

「大丈夫だ。」いつのためソルトウォーターで生きて
いけるように
している」

「やうなんだ」

「あの、吉井君つても皿食べないんですか?」

「こや、一応食べるよ」

「こやい、あれを食つてから病院行つて」

「……あれは食べてこると言えるのか?」

「あれを食べているって言えるんなら脳外科行つてこい」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食つて
水と塩だらけや。」

雄一とはよく声が重なる。雄一とは気が合いそうだ。

失礼な。きちんと砂糖も食べているさ！」

「あのお母さん、吉井君は水と塩と砂糖にて食へると云ひませんか？」

「舐める、が表現としては正解じやな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

仕送りが少ないんだよ！」

「明久、俺はお前の半分の仕送りで暮らしているんだぞ？」

なんであんなに無駄すかにしても無くなひなしの

۱۰۴

「俺はお前と違つてバイトをしているんだ。だから大丈夫な

卷之三

んだ

「あの、良かつたら私がお弁当作つてきましょうか?」

「え?」

「お~お~、字が違う」

「本当ここなの?」

「はい。明日のお皿でよければ」

「良かつたじやないか明久。手作り弁当だぞ?」

「うん。」

明久が雄一のからかう口調を心地よく聞いている。

「……ふーん。瑞希って随分優しいのね。吉井、だけに作つてくれるなんて」

ずいぶん棘のある言葉だな。もしかして島田つて明久の「」と
好きなのか?

「あ、いえ~その、皆さんにも……」

「俺たちこそ?いいのか?」

「はい。嫌じゃなかつたら」

「それは楽しみじゃの?」

「 . . . (ハク ハク) 」

「 . . . お手並み拝見ね」

「 七人分作るのはきついから、ザートは俺がつくるから」

「 え、でも . . . 」

「 いいんだよ」

「 わかりました。それじゃ、皆さん作ってきますね」

「 姫路さんって優しいね」

「 そ、そんな . . . 」

「 今だから言つけど、僕、初めて会つ前から君のこと好き

「

「 おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「 こしたいと思つてました」

「 明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」

「 明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「 だつて . . . お弁当が . . . 」

お前が貧乏るのが悪いんだぞ。

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻るわ

そういえば、もとは試召戦争の話だったな。

「雄一」。一つ気になつていてんじやが、どうしてEクラスなんじや？

階段を踏んでいくなりEクラスじやるつし勝負に出るならAクラスじやるつ。

「やつじえば、確かにそつですね」

「まあな。だがライトはわかつてんじやないのか？」

「ああ、大体はわかつた

「本當ー？」

「ああ、まづEクラスを攻めない理由、これは戦うまでもない相手だからだ」

「え？でも、僕らよりもクラスが上だよ？」

「振り分け試験の時はそつだつたかもしけない。けど、実際は違つ。

オマエの周りの面子をよく見てみる」

「えーっと……」

「美少女一人と馬鹿が一人とムツツリが一人と美幼女が一人いるね」

「誰が美少女だと…？」

「ええつー…? 雄一が美少女に反応するのー…?」

「…。(ボツ)」

「ムツツリーーまでー…? ビウジョウ、僕だけじゃツツコミ切れないと！」

「おい落ち着け。一人とも」

「そりゃだ。代表にムツツリーー！」

「秀吉（美少女）・ライト（美幼女）ありがとう」

「おいー今、美幼女って言つたろー！」

「わしは男じやー！」

「おいー俺も男だー！」

「と、それよりもライトの言つてないことはーー〇〇点満点だ

「やつぱりな」

「で、ここからは俺が説明する。姫路やライトに問題無い今、

Eクラスと戦つて

も意味がないってことだ

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「いや、ライトもいるから確実に勝てるが、Dクラス戦ではライトは出れない」

「隠しておくれてことか」

「そうだ、ライトを出さなかつたら確実に勝てるとはいえない」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

俺の予想だとDクラスを倒し次にBクラスだな。

「あ、あの！」

「ん？どうした姫路」

「えつと、その言いかけた、って・・・吉井君と坂本くんは前から試合戦争について話しあつてたんですけど？」

「ああ、それが。それはつこさつき、姫路の為にって明久に

「それはそうと…」

明久お前はほんとに勇気がないな。

「さつきの話Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ

「負けるわけないさ」

「お前らが協力してくれるなら勝てる」

協力してくれたらって俺は代表に付いていくだけだけだ。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

ふふつ、面白い。

「いいわね。面白そうじやない！」

「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの

「・・・（グッ）」

「が、頑張ります」

「俺は雄一について行くぜ」

打倒Aクラス。荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵
空事かもしけない。

だが、やってみないと始まらない。折角いじつして同じクラスになつたんだ。

何かを成し遂げるのも悪くない。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよつ

涼しい風がそよぐ屋上で、俺たちは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

第三話（後書き）

クリオネース。

光「なんでカタコトなんだ？」

次の話はオリキャラ紹介一したイとオモイマス。

光「そうなのか、だがなぜカタコト

ではまたライシウ。

オリキャラにつ設定（前書き）

こんかいはオリキャラせいていにしたいとオモイマス
一体めのオリキャラです(／＼^)＼＼＼(。ー。＼)

オリキャラについて設定

黒月 皆人【くろつき みなと】

性別 男

容姿 髪は藍色で髪は秀吉の少し長いばん。髪型はFFのレオン瞳の色は黒色。

顔は上の中ぐらい。

性格 ハロと友達のためなら命でも捨てるという性格。

趣味 康太の手伝い、機械いじり

特技 カップ測定、盗聴器及び盗撮用力カメラを5秒で見つける

一人称俺 三人称 黒月、皆人 二つ名『ムツツリの右腕』

腕

得意科目 数学、保健体育

苦手科目 古典、科学

総合科目 4500～5000点（主に保健体育と数学）

家族 両親は13の時に事故死、そして今は一人暮らし

友達 康太とは幼馴染兼相棒。ライトとも仲が良い。

召喚獣 本人デフォルメ

武器 グレートソード

装備 赤い甲冑

腕輪 リバース
反転

効果 こちらへのダメージを相手に与える。

消費点数 300点

オリキャラについて設定（後書き）

クリオネーデーす

光「お、カタコトじやなくなつたな」

当たり前だよ。ハツハツハ！

光「いら付いた！死ね！」

ガキン！！（作者の武器と光の武器が交える音）
光「なに！？なぜこんなに強い？」

それはな、作者だからだよ！

光「くつ！このままで…そうだ！」

どうした？俺に勝てる方法でも見つかったか？

光「では、また今度会いましょう」

それはセコイ！

ダダダ！！（光が思いつきり走る音）
では、また今度（○・・○）／

第四話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『（1） $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に

存在するXの値を一つ答えなさい。

（2） $\sin(A + B)$ と等しい式を示すのは次のどれか？

「？」の中

から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

「（1） $X = \pi/6$
（2）？」

教師のコメント

そうですね。角度『。』ではなく『』で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

「（1） $X = \pi/3$ 」

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

「（2）およそ？」

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

風峰光の答え

- 「（1）X = / 6
- （2）確か？ だつたかな」

教師の「メント

一応あつてますが、いらない言葉を入れないよう

「ああ～、暇だ

俺はテストも全て終わって寝転がっている。

「はあ、お前があんなに早くテストを終わらせるからだぞ

「仕方ねえだろ、あのテスト簡単すぎたし

俺はさう言つて、鞄から音楽プレーヤーを取り出してイヤホンを刺した。

「俺は少しの間音楽聞きながら寝とくから鉄人が来たら教えてくれ

「わかった

俺は雄一に伝えるとそのまま寝た。

「風峰 起きろ

「うーん

「おー、風峰起きろ

「ん、あれ？ 西村先生雄一は？」

俺は雄一に起^ハせといつたはずなんだが . . .

「坂本なら試召戦争に行つたぞ」

「そうですか . . .

「^ハ」と^ハ分かつて^ハるな?」

「^ハ」

「じゃあ、ついて^ハ」

俺は鉄人の後を追つた。

（補修室）

「「「「おお～～～～！」」」

モ「天使が、補修室に天使が舞い降りた！」

「何言つてんだ?」

とにかく俺は全員を見て回つた。

「ふつ、疲れた^ハ」

「すまんな。手伝つてもううつて

「いや、いいんですよ」

「そ、うか？」

そういうて鉄人が去つていつた。

「さて、帰るか」

俺は靴にはきかえて校門を出た。

「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだつた！」

卷之三

先に帰つてしまふ
んじゃ

待ち込んだ 待てるわけがなしたス

わがこでしたにと
薄情もの

明日は学校に向かうた

さて、帰るが

待て雄

「ウタクシ」

「俺から逃げれると思つていいたのか？」

「すいませんでした！！」

そういうて土下座する雄一。

「はあ、仕方がない今回は許すが次は殺る」

「わかった。で、次はBクラスを攻めるからな」

「分かっている。設備を交換しなかつたってことはBクラスのパソコンを破壊してくれとでもいったんだろ？」

「ふつ、さすがだな、何でもお見透視つてことか」

「まあな。だが、次は絶対出させてもうつからな」

「当たり前だ。お前が出なかつたら負けるかもしれないからな」

「そうか。ん、俺はこいつだから。また明日な」

「ああ、また学校でな」

「そういうて俺たちは別れた。

ガチャッ！

「ふう、疲れた」

「あら、やっと帰ってきたのね」

「ん? なんでいるんだ? 優子」

「そつ、それはおつ、幼馴染にあいにきただけよ！／＼
「そつなのか？でもなんか顔が赤いぞ。熱でもあるんじゃな
いか？」

「だつ、大丈夫よ！／＼／＼

「そつか？ならいいんだが」

なんか優子の顔がまた赤くなつたが氣のせいか？

「で、なんか食べたいものあるか？」

「えつ、うーん……今は別にいらないわ」

「そつか。で、なんか話があるんだろ？」

「え、う、うん」

「話つてのはなんだ？」

「えーっと……秀吉がAクラスに向けて試合戦争をするつ
て言つてたから、

少し賭けしない？」

「ほつ、お前はあまり賭けが好きじゃないのにな

「そつかけど、でも絶対に勝てるつて自信があるからやるわ
けだし……」

「まあな。で、賭けの内容は？」

「負けたほうが何でもやうことを聞くってのはどう?」

「わかつた。それじゃ、遠慮なく勝たせてもらうからな」

「勝つのは私よ」

そういうて優子は家から出ていった。

クラス単位ではFクラスには不利すぎるな。雄一なら一騎打ちとでも

言うだろ?、こっちは俺、雄一、姫路、康太、明久を出すとして、

相手は優子、霧島、久保、皆人、愛子が出るだろ?な。

まあ、俺は優子と、雄一は霧島、姫路は久保、康太は皆人で明久には工藤

として、後は対戦科目だな。

△クラス戦に向けてブツブツ言つ俺だった。優子があんなこと言つんだから

何があるだろ?、と、考えているつむか十一時になつっていた。

「ん、もう二んな時間か。さて、寝るか

そつ言つて俺は眠りについた。

第四話（後書き）

作者です)

光「なんか今回短かつたな」

そりなんです。その代わり次回は少し長くしようと思いまーす

光「そりなのか。まあ、がんばれ」

へいへい、ではまた会いましょう。

第五話（前書き）

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師の「メント
よくできました。」

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師の「メント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師の「メント

先生もRPGは好きです。

風峰光の答え

「高速」

教師の「メント

確かにそうですが・・・

翌朝、いつも通り学校に向かう。今日は試験戦争で消費した点数を補給する為に

テスト漬けのはずだ。

「おはよー」

「グッモー」

教室の戸をガラガラと開ける。相変わらずの畳と卓袱台。Dクラスの設備も少しもつたいたんじゃないかと思つたり。

「おう明久、ライト。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄一」

「おっはー」

既に到着していた雄一が隣の卓袱台で胡座をかいている。持つてしているのは

英語の教科書。一応テスト前の悪あがきをしていくよつだ。

「おい雄一、ほかの奴らには何も言われなかつたのか?」

「ん? 何がだ?」

「Dクラスの設備の」と

折角勝ち取ったのを占領しないなど、普通は不満に思ひます
だ。

「ああ。眞にまちがひると説明をしたからな。問題ない」

「ふーん」

皆が素直に言つたとを聞いたのは昨日の雄一の働きを評価してのじだらう。

もつと上を狙えるかもしけないとわかつた以上、Dクラス程度の設備には興味がないといったところか。

「それよりお前はいいのか」

「何が?」

「昨日の後始末だ」

「ん? 明久なんかしたのだろうか?」

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされるとわかつていながら行動するなんて

ありえないよ」

「生爪! ? こいつ何しでかしたんだ! ?

「いや、俺の始末じゃなくて」

「一体何が言いたい」

「吉井つー。」

「「」ぶあつー。」

明久の台詞が突然の拳で遮られる。

「し、島田さん、おはよつ・・・・・」

「おはようじやないわよつー。」

随分といきりたつている様子の島田。

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消化器のいたずらと窓を

割つた件の犯人に仕立てあげたわね・・・！」

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングがあがつちゃつたじやない！」

まだ上がる余地があつたとは意外だ。

「　　と、本来は掴みかかっているんだけど」

島田が急に冷静さを取り戻す。

「掴む前に殴つてはいるから十分だと思つが・・・。」

「アンタにはもう十分罰が与えられてるようだし、許してあ

「うん。さっきから鼻血がとまらないんだ」

「いや。セツジヤなくてね」

「ん、それじゃ何?」

「一時間田の数学のテストだけど」

島田が楽しそうに、本当に心から楽しそうに叫びかる。

「監督の先生、船越先生だつて」

聞いた瞬間、明久は扉を開けて廊下を疾駆していった。

「なあ、明久に何があつたんだ?」

「昨日の試合戦争でいろいろとね」

「ふーん」

そう言いながら俺たちはテストを受ける準備をしていた。

（）

「うあー……づがれだー」

明久が机に突つ伏す。

とつあえず因教科が終了。テストはやっぱ疲れるな。

「つむ。疲れたのつ」

いつの間にか近くに来ていた秀吉が答える。今日は髪をポーテールにしている。その顔でポニー テールなんてしたら女にしか見えないぞ。

「 . . . (ロクロク) 」

いつも無口で存在が薄く思われがちな康太もいる。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

おいおい、人間が食う量じゃないだろ！

「ん？吉井達は食堂に行くの？だつたら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもうつね」

「 . . . (ロクロク) 」

康太がうなずいているのは下心のせいだら。島田に色気を求めて無駄だというのに。

「ねえ、吉井、風峰、なんかウチの悪口^{アレ}言^ハえない?」

「滅相も^{アリ}こません」

「そんなことはないだ」

「こつは相手の心を読めるのか?」

「じゃ、僕は贅沢にソルトウォーターあたりを

「お前は塩水をも贅沢とぬかすか」

「あ、あの。監さん

立ち上がり、食堂に行こうとしたところで声をかけられた。

「うふ? あ、姫路さん。一緒に学食に行く?」

「昨日の約束の

「あ、いえ。え、えっと . . . お、お宣なんですが、その

姫路がもじもじしながら俺達の方をみてくる。どうしたんだ。

「おお、もしや弁当かの?」

「は、はい。迷惑じゃなかつたひつひつ」

と、身体の後ろに隠していたバッグを出してくる。やつこえ
ば、そんな約束

もしてたっけ？

「迷惑なもんか！ね、雄一、ライトー。」

「ああ、そつだな。ありがたい」

「そつですか？良かつたー」

ほこやつと嬉しそうに笑う姫路。不思議だ。『ご馳走してやる側なのに喜ぶとは。俺には優しい女の気持ちなんてよくわからねえ。

「むー・・・・。瑞希って、意外と積極的なね・・・」

明久を親の仇のように睨んでいる島田。厳しい女の気持ちもよくわからねえ。

「それでは、せつかくの『ご馳走じやし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのつ

「そつだな」

「そつか。それならお前らは先に行つてくれ

「ん？雄一はどう行くの？」

「飲み物でも買つてくれる。昨日頑張った礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

おつ、珍しく気遣いを見せる島田。一体どう風の吹き回しだ?

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きつらんと俺たちの分をとつておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「やつ遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくの」

雄二と島田は財布を持つて教室に出ていった。一階の売店にでも行つたのだろう。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

明久が姫路の持つていたバッグをもつて屋上まで歩いていった。

「ん、秀吉? どうしたんだ? 早く行へぞ」

「の、の?」

「ん? なんだ?」

何故か秀吉の顔が赤い。風邪か？

「で、手を繋いでもいいかの？」

「どうした？急に」

「な、なんでもないのじゃ。——」

「ん？まあ、手ぐら」なら繋いでやるけど」

「ほ、ホントか！」

「ああ、ホントだが……」

「わあ行くのじゃ」

俺は秀吉と手を繋ぎながら屋上まで歩いていった。

（　）

「天氣が良くてなによつじゃ」

「やつですねー」

「で、秀吉。もつ

「な、何を言つのじゃー明久ー」

「えつーーもつ、言つたのかと思つたよ」

「そ、それは、Aクラスとの後にするつもりじゃ」

「そ、う、なん、だ、」

「おい、なんの話だ？ 俺も混ぜろ！」

「「.---(#C) またね」」

なんだよ！教えてくれたっていいじゃんか」

「おとのお楽しみじゃ」

だ。

俺たちは一齊に歓声をあげた。すう、くつまやつだ。唐揚げや
エビフライに
おにぎりやアスパラ巻など、定番のメニューが重箱の中に詰
まっている。

「それじゃ、雄一には悪いけど、先に

卷之三

「あー、するニゾムツツリー！」

動きの素早い康太が明久のエビフライをつまみとった。そして、流れるように口に運び

「 . . . (パクッ) 」

バタン ガタガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震え出した。

「 」

「 」

「 」

秀吉、明久と顔を見合わせる。

「 わわっ、土屋君！ ？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とす。

「 . . . (ムクリ) 」

康太が起き上がった。

「 . . . (グツ) 」

そして、姫路に親指を立てる。

多分、『凄く美味しいぞ』と伝えたいんだわ。

「あ、お口に合いましたか？良かつたですっ」

「ムツツリーーーが言いたいことが分かつたのか、姫路が喜ぶ。
だが、康太
それならなぜ足が未だにガクガクと震えるんだ？俺にはＫ
〇寸前のボクサー
にしか見えねえよ。

「良かつたらどんどん食べてくださいね」

姫路が笑顔で勧めてくる。俺はその笑顔がまるで悪魔のよつ
にしか見えない。

（・・・秀吉、ライト。あれ、どうゆうつ？）

（・・・どう考えても演技には見えん）

（・・・もし、演技だとしても俺たちにはなんのメリットも
ない）

（だよね。正直やばいよね）

（明久。お主、体は頑丈か？）

（正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎて退化し
てるから）

(なり、俺がこいつー。)

(だ、ダメじゃー。危険すぎるのじゃー。)

(仕方がないだらう。あとのこと任せせるや。)

そう言つて俺は箸を持った。

(こやぢ参るー。)

パクつ！

「 あ、案外うま ゴバアつー。 」

「 ライライ。 」

俺はそのまま意識がえらつた。

第五話（後書き）

ドウモー 作者クリオネです~

光「おいつ！なぜオリキャラ紹介したのにそのオリキャラを出
さん！」

ばかだな~。AクラスのオリキャラだからAクラス戦につか
うに

きまつてんだろ！

光「 そ う か。 な ら い い ん だ が . . .

で は ま た 会 い ま し ょ う ~

光「 バ イ バ イ ！」

第六話（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

「C₆H₆」

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

「B-E-N-N-E-N」

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよつよ。

風峰光の答え

「C₆H₆」

教師のコメント

君はもつともな回答は出来ないんですかー??

風峰光の「メント
「無理」テース」

「……」は？俺が気づいた時、空ではなく白い天井があつた。

「」は……保健室か

「どうか、あの後俺は何時間か目覚めなかつたからここに放置つてことか。

「早く教室にいかねえと」

俺はそう言いながら教室に向かつていった。

「じゃ、行こうか。人数少なくて不安だけど」

中から明久の声が聞こえた。

「おい、俺を放置したやつの名だけを言え」

「なー！ライ特ー！？オマエ生きてたのかー！？」

「当たり前だ！あんなの死ねるかよー！」

入った瞬間、雄二が俺死人扱いしてきた。

「で、どこに行くんだ？見た感じ戦争は終わつてゐるようだが・

・」

「ああ、今からじクラスに行く」

「なぜだ？」

「じクラスが俺たちに戦争を仕掛けよつとしてんだ」

「わつこり」とか。なら、俺もついていく

「お前だとそういうふうと思ったが、まあ人数が少ないからな贅沢は言ってられねえな」

「どうでもいいけど早くこいつせ」

「そうだな」

俺、雄一、明久、姫路、康太というメンバーでじクラスに向かう。

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれんのよ」

「それって吉井が悪いのか?」

廊下に出たところで、ハンカチで手を拭いている島田と鞆を肩に担いでいる須川に会つた。

「あ、島田さんに須川君。ちょうど良かつた。じクラスまで

付き合つてよ

「んー、別にいいけど?」

「ああ。俺も大丈夫だ」

盾、とでも思つてゐんだらうな、明久は。

「急がんとこのクラスの代表が帰つてしまつぞい」

「だな。急いづ」

こうして更に島田と須川を加えた七人でこのクラスへと向かうことになった。

「Fクラスの代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は?」

教室の扉を開くなり、雄一がそこにいる全員に告げる。

このクラスの教室にはまだかなりの人数が残つていた。

「私だけど、何かようかしら?」

俺らの前に出てきたのはまじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気

が強そうな女子。確かに名前は小山だからヒステリー小山でいいや。

「なんかそこの子が私の悪口を言つてるような・・・」

「そんなことはねえよ

あぶねー！なんだあいつはー相手の心が読めるのかー？

「そんなことはおいといて、Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん・・・」

いやらしい笑みを浮かべているヒステリー小山。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ・・・。ビッシュようかしらね、根本クン？」

ひすて・・・だるいのでヒス小山が教室の奥にいる人たちに声をかけた。

「当然却下。だつて、必要ないだろ？」

「なつー？根本君ー？ビッシュBクラスの君がこんなところに

ー！」

いかにもクズ顔している根本が出てきた。今、俺たちの敵の代表である。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試

召戦争に

関する行為を一切禁止したよな？」

「何を言つて　　」

「先に協定を破つたのはそつちだからな？これはお互い様、
だよな！」

クズが告げると同時に取り巻きが動き出す。そして先程まで
戦場にいた、

小柄な数学の長谷川先生の姿が隠されていた。

「どうせ攻撃していくんだ、なら先手必勝！Fクラス風峰が
Bクラス全員に
数学勝負を仕掛ける！」

モ「なにつ！？俺たち全員にだと…？ふざけやがつて…」
モ「返り討ちにしてやるよ…」

「雄二！」は俺が引き受けたから逃げろー。」

「試験召喚！…」
サモン

『Fクラス風峰光 数学 合計785点

VS

Bクラスモブ全員 数学 合計785点

モ「何！？500点オーバーだと…？」

モ「だが数ではこっちが有利だ！」

モ「7人差で勝てるかな！」

「戦争中は戦えなかつたからな存分に暴れるぞー。」

俺は腕輪を使った。俺の腕輪は早くなるけど操作が難しくなる。

バンッ！俺は一番前にいたやつの召喚獣の頭を撃つた。

モ「なーーもうやられたぞーー。」

バンバンッ！敵がちゅうびー列に並んでいたので先頭の頭を撃つた。

モ「俺もだ！」

モ「私もよー！」

モ「俺のやつもだー！」

『Fクラス風峰光 数学 512点

VS

Bクラスモブ全員 数学 DEAD』

「なんだ、こんなに弱いのか。がっかり

俺はそうつって教室に帰つていった

「あー、疲れたー。」

（）

「へ、ライト！無事だったのじゃな！」

「おー！全員片付けてきたぞー！」

戸を開けると秀吉が駆け寄ってきた。

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事だったようだね」

「ん。ただいま」

雄一と明久もやつてくる。康太も「うちを見て小さく頷いた。

「あー、お前ら」

「ん？」

その場にいる全員を見回して雄一が告げる。

「こなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形に

なるだろ？が、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい

向こうもそれが狙いなのだから、俺らが勝ったとしたら間違いないく息つく

暇も「えずに攻めて来るだろ？」

「それならビビつじよ？このままじゃ勝つてもCクラスの

餌食だよ。」

「やつじやな . . .

「大丈夫だ。雄一がなんの作戦もないまま突つ込むほど馬鹿じやない」

「やつじや」とだ」

「お前ら . . . 何のために秀吉をクラスにおいていたと思つてるんだ?」

まあ、これが自分でも考へたせるか。

「向うがそつ来るなら、いつかにだつて考へがある」

「考え?」

「明久、田には田を歯に歯をつて言葉聞いたことないか?」

「つまり、明日の朝にその考へつてのを実行するつて言つてんだよ」

「やつじや」とか

「まあ . . . こつま一体どいまで馬鹿なんだ?」

「ライト今に始まつた事じやないだろ」

「それもやつだな」

た。

この口はそれで解散となり、続ければ翌日へと持ち越しになつ

第六話（後書き）

ドウモークリオネです

光「同じくライトだ」

いや～戦争でられなかつたね！

光「さすがに姫路の弁当があそこまで強いとは・・・」

「ご愁傷さま・・・では次は、やつと明久に例のあの子が・・・」

光「ネタバレしていいのか？」

大丈夫だよ。その時には、君の記憶も消えてるから

光「なに～～～！！！」

では、また今度～～

光「またな～」

第七話（前書き）

問 以下の間に答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「good - better - best bad - worse
- worst」

教師のコメント

「そのとおりです。」

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

「まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級

と最上級は語尾に - erや - estをつけるだけじゃダメです。」

「覚えておれましょ!」

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

風峰光の答え

「good - friend - company」

教師のコメント

『良い』『友達』『仲間』不正解ですが君の解答は好きです。

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した俺らに雄一は開口一番をつ告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦予定時刻は九時だ。

「明久、少しは考える。BじゃなくCの方だ」

「ライトの言つたりだ、そして秀吉にはこれを着てもいいつ

そう言つて雄一が鞄から取り出したのはウチの学校の女子制服。

「…雄一それをどうやって手に入れたんだ？」

「い、いやじゃ…ライトのおる前では女装などせん…」

「分かつた、なら…」

「何がグフツツ…（バタツ）」

突然、雄一に腹を殴られ俺は気絶した。

「う、う…」

「お、やつと気がついたか」

田の前にはクソ（コウジ）がいた。

「おー、今クソと書いて俺って読んだだー！」

「あん、クソにクソって書いて何が悪いんだー…ああー！」

「まあ、それはおーとこー」

「おーとくなー！」

「黙れ！お前のせいで俺は秀吉に折檻されてたんだぞー！」

「折檻！？秀吉が？ありえねー！」

「で、今からBクラスまで行くからつこてこここ

「つょーかい

俺はそつとつて雄一につこて行つた。

／＼

「お前、いろいろ加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがつて。暑ぐるしことの上ないつての

Bクラスの代表、根本の声が聞こえる。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

対する雄一。姫路が参加してない所を見ると本体を動かざるおえない

状態なのだろう。

『らあつ！』

明久の声だ。壁から大きい音がするつてことは壁でも壊すのか？

奇襲、さすがはキング・オブ・バカなだけはあるな。壁を壊しての

明久にダメージはあるがこれ以上なつてぐらいいい作戦だ。

「はあ？ギブアップするのはそつちだろ？」

「無用な心配だな」

「わかったか？お前らの綱の姫路さんも調子が悪そつだぜ？」

「……お前らには役不足だからな。ライト行つてこい。」

「わかった！」

「けつ！数学が少しできるからつて調子に乗るなよ。」

モ「俺たちが相手だ！」

モ「行くぞ！」

『試験召喚！！』
「サモン

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点

VS

Bクラス モブ一人 現代国語 合計 253点

モ「何つ！400点オーバーだと…？」

モ「姫路以上の実力じゃねえか！？」

「弱い！」

俺は召喚獣でモブ一體の召喚獣の頭を打ち抜く。

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点

VS

Bクラス モブ一人 現代国語 DEAD

「どうだ？これで俺たちに心配する必要はかくなつたよな

「けつ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお

「負け組？それがFクラスのことなら、
もつすぐお前が負け組代表だな

『はああつ！』

明久の攻撃は今まで四回目。ファイードバックあるんだからやりすぎない

「」を願ひて

何かやっているのか?」「壁がいなせえな

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないか？」

「ナウ。いいでる。じゃあやつ決着だ。お前ら、一気に押しだす

卷之三

「下がるべ！」

「どうした、さんやんふかしておきながら逃げるのかー。」

「いや！俺たけで十分たって意味だよ！」

ほー！ ぬかせ！

来た！よし俺は作戦道理に！

「Fクラス風峰Bクラスの全員に現代国語勝負を仕掛ける！！」

モ「正氣か！？」

モ「俺たち全員に勝負だと！？」

モ「返り討ちにしてやるぜー！」

「あとは頼んだぞ！明久！」

「わかつてゐよー！」

『Fクラス 風峰光 現代国語 438点

VS

Bクラス モブ全員（近衛部隊以外） 現代国語 153

2点

「ちつ！近衛部隊を逃した！」

モ「殺れ——！」

モ「おおつ——！」

「なら俺はこっちをかたづけるか！」

俺は召喚獣の銃口をモブたちの召喚獣がいる方に向ける。

「いつけ——！」

俺はマシンガンの如く乱射した。

「オラオラオラ——！」

モ「そんなに適当に撃つてたら当たらねえよ。」

俺の召喚獣が斬られるがからうじて生き残った。

『Fクラス』 風峰光 現代国語 30点

VS

Bクラス モブ三人 現代国語 125点

「いや、お前らの負けだ」

モ「はつ? 何言つてんの?」

卷之三

モブは不意に根本のほうを振り返る。^{クズ}

『Fクラス』
土屋康太 保健体育 441点

VS

Bクラス　根本恭一　保健体育　DEAD

モ「な、なんだと～～！～～！」

ムツツリーが一撃で倒したそうだ。

「戦争終了！ 勝者、Fクラス！！」

モ全「ヤツタ――――――――――――――――――」

今ここに、Bクラス戦は集結した。

「明久よ、随分と思い切った行動にてたのう」

終戦後、Bクラスにやつてきた秀吉が明久に言つた。

「だつて痛いもん！」

「いやが、お主らしい作戦じやつたな」

で、でしょ？ もう、と褒めてもいいと想ひな？」

「後のことは何も考えずに自分の立場を追い詰める、すぐ明久にお似合いの作戦だつたぜ」

「…………遠まわしにバカって言つてない？」

「そうだが？」

「うわーーん！」

普通、学校の壁を破壊するなんて、まさしくバカにしか考えつかない

作戦だつたな。

「ま、それが明久の強みだからな」

馬鹿が強みか、いいことを言ひつな。

「わて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「…………」

「本來なら設備を明け渡してもいい、お前らには素敵な卓袱台を

「本來なら設備を明け渡してもいい、お前らには素敵な卓袱台を
プレゼントするといろだが、特別に免除してやりんでもない」

そんな雄一の発言にざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言つたが、俺たちの目標はAクラスだ。

「こじが『ゴールじゃない』

「うむ。確かに」

「元はあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑め

ば開放して

やううかと思ひ

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になつた。

Dクラス戦でも言つたことだ、雄一の性格を理解し始めるのだらう。

「 . . . 条件はなんだ」

力なくクズが問う。

「 条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前は散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障り

だつたんだよな」

凄い言い様だが、そやつて言われるだけのことは奴はしている。

だからこそ周りの人間は誰もフォローしない。本人も分かっている

みたいだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の晩に言つていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試験戦争の準備が出来てこると宣誓してこい。

そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。

あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ

「……それだけでいいのか？」

疑うようなクズの視線。馬鹿が、雄一がそんだけで許すとでも思つてんのか？

「ああ。Bクラス代表がこれを着て言つたとつりに行動してくれれば

見逃そり」

そう言つて雄一が取り出したのは、先ほど雄一が秀吉に着つて

いつてたやつだな。

「ば、馬鹿なこと言つたなー」この俺がそんなふざけたことを

「……！」

モ「Bクラス生徒全員で必ず実行させよー!」

モ「任せて！必ずやらせるからー！」

モ「それだけで教室を守れるのなら、やらない手はないな！」

Bクラスの仲間たちの温かい声援。これを見るだけでクズが

今まで

どういった行動を取つてきたのかがわかる気がする。

「んじゃ、決定だな」

「くわーよ、寄るなー変態ぐふうー」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。あいがとな」

一瞬で代表を見限つて腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の雄一も変り身の早さに驚いている。

「では、着付けに移るにしょつか。明久、任せたぞ」

「了解っ」

俺は何故かこの後に嫌な予感しかしなかつたので家に帰ることにした。

帰る途中～

次はAクラス戦かやつとこここまで来たつて感じだな。家帰つて勉強でも

しどかねえと優子に負けちまうかもしけねえからな。優子、勝つのは俺だ!!

第七話（後書き）

「どうも、作者です」

光「ライトだ」

何か最後カツコつけてたね！

光「だまれ！貴様のしたことだぞ！」

とゆうことだ、今回はゲストをお呼びしました！

光「豪快に無視すんな！」

皆「よお、久しぶりだな。ライト」

光「おおつ！皆人か！」

まだ出してないのでかわいそそうだと思つて出しました。

光「よかつたな、皆人」

皆「本当に良かつた！この作者は優しいぜ」

ああ・・・ちょっとと言いにくいくらいんだが・・

光「うん、どうした？」

もう終わりなんだわ。

皆「なに～～！～！」

と言つことでさよなら

光「ここは流れに合わせて、また次回会いましょう」

皆「・・・・・（ぐすり）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5869x/>

バカと最強の男の娘と召喚獣

2011年11月1日20時11分発行